



森國太郎先生近影

略 歴

- 昭和5年7月7日 青森県生まれ
昭和29年3月 東京教育大学体育学部体育科卒業
同年 4月 東京教育大学体育学部体育心理学研究室教務補佐
聖パウロ高等学校教諭
昭和34年4月 愛知大学専任講師
昭和38年4月 愛知大学助教授
昭和49年4月 愛知県立大学講師（昭和51年3月まで）
昭和54年4月 愛知大学教授

学内での役職

- 各種委員 体育研究室長 プール建設委員 学生部委員 会館建設委員 評議会委員
大高土地委員 教養課程検討委員会委員 給与委員会委員 建設委員会委員
教養部将来計画委員会委員 体育館準備委員会委員 入試管理委員会
委員 学生相談室室長 学生部委員会委員長 三好校地建設委員会委員
など
運動部長 運動部長協議会常任幹事 バレー部部长 少林寺拳法部部长 サイクリン
グ部部长 応援団部部长 など

愛大体育の過去・現在・未来

——森國太郎教授の退官記念論文にかえて——

植屋春見*

1. はじめに

森國太郎教授が、定年まで5年を残して勇退されることになり、これもまた森先生らしいのかなあと思いながらも親しく議論することもできなくなると思うと一抹の淋しさを感じる。

原田さんから、君が一番つき合いが長いのでから送別原稿を書くようにということであったが、付き合いの密度という点では、佐多君や原田さんの方が濃いということを断って、本学体育の創設期の苦渋の時間を共有した戦友ということで引き受けることにした。

森先生には、愛大体育の過去・現在・未来を語ることで、その労をねぎらう文章に代えることをお許し頂きたい。

戦後、最大の大学改革である「大学審議会の答申」が1991年2月8日に出され、同年7月1日をもって新しい「大学設置基準」の運行に入った。

その結果、これまで必修として義務づけられてきた「外国語」や「体育」も各大学の判断で、選択でもゼロでもいいことになった。

大綱化後の教育をどうするかについては、どの大学でも専門と教養の担当者間で熾烈な綱引きがなされ、必ずしも今日的及び明日の大学教育の使命を正しく分析し検討がなされたようには思われぬ。

特に、体育に関しては、必修か選択かという枝葉だけで処理され、過去の正しい総括や新時代における体育の意義と真摯に正対し結論を出した大学は絶無に近い。

2. 愛大体育の過去・現在・未来

本学には、創設以来、名目だけの体育担当者

はいたが、体育学部出の体育の専任が赴任したのは森先生が最初で、昭和34年であった。小生が38年に着任した。

森先生は、東京教育大学体育学部で体育心理学を専攻され、同教室で副手をされておられ、わが国で初めて、スポーツの因子分析に取り組みられた前途有望な若手の研究者であった。

コンピューターが、発達した今でこそ、RテクニックやQテクニックは誰でもやっているが、昭和30年頃は、誰も知らない手法であった。森先生の話によると神田の古本屋街で米国の文献を見つけだし、翻訳しながら手回しの計算器で気の遠くなるような仕事だったということであった。

東京大学の西尾貫一教授から東大への就職を勧められたが、それを断って田舎に引っ込んだ男だという話は、米国で凶弾に倒れた若い頃の松田岩男元中京大学学長から聞いたし、野口義之先生や直塚鉄太郎先生からも聞かされていた。

小生も、恩師、金原勇先生がすすめてくれた国立大学への就職を蹴って、薩摩隼人のハシクレですから、体育に理解があり、体育が完成している大学に就職して小さくなっているより、充実していない大学で、理解のない学生を相手にしながら、充実に努める人生の方を選択したいと大口を叩いていたので、条件が悪いという一字に魅せられて愛知大学を選んだ。

小生が着任した時の本学体育は悲惨なものであったので、森先生の着任当時はもっと劣悪だったことは容易に推察できる。

昭和38年頃の本学体育は、

- ①体育の大半が正規の時間帯の中になく、日曜日や夏休みに実施していた。
- ②体育施設は豊橋校舎に草茫々のグラウンドと旧軍隊の床に穴の空いた講堂があるだけで、名

* 愛知大学体育研究室

古屋校舎は体育施設は皆無であった。

- ③昼間部の半分は時間帯の中に組み込まれていたが体育の授業に出てくる学生は、1時間当たり300名前後であった。森先生と小生の仕事は、出席カード配りとソフトボール、卓球の班分けと用具配りだけであった。
- ④他教科の教員の体育への理解は、全くなし、
- ⑤学生の体育に対する態度もいい加減、であった。

その頃の本学は、経営的にも大変苦しく学生が納入した授業料をその場で、別な袋に入れ替えて、未払いの教職員の給料を支払うという徹底した貧乏大学であり、加えて、山岳部13名の薬師岳大遭難があった時期でもあったので、体育の当局への要望は全て糠に釘であった。

体育に関してこれ以上条件の悪い大学は全国どこを探してもないだろうという環境で森先生と小生の生活が始まった。

名古屋校舎の体育は、豊橋校舎以上に劣悪で、名城公園や鶴舞公園、東邦高校、筒井小学校、名鉄体育館などの借用できる施設を梯子しながらジプシー体育を続けていた。

日曜日に東邦高校のグラウンドで行った体育では、昼食は、砂混じりのザラザラした弁当で、それも今思うと楽しい思い出でもある。二人は、本学体育をどのように改善するか、先輩後輩を忘れて連日、熾烈な議論をしていた。

そして、

- ①体育の授業を時間帯に組み込む。
 - ②授業を語学クラス単位に少人数化する。
 - ③体育担当者（専任・非常勤）を増員する。
 - ④体育施設・用具を充実させる。
 - ⑤大学設置基準通り体育の授業を実施する。
- などの共通理解をし、その改善の努力を始動した。

これらの努力目標の解決のために、生来、会議嫌いの二人も、教授会にも積極的に参加し、苦手な役職も我慢して引き受け、その都度、体育の不備を訴え改善方を要求し続けた。

体育の教員増要求や体育施設要求に際しては、委員でもないのに評議会や学部長会議、建設委員会などにも乗り込んで、その必要について直

訴もした。その後、評議会、建設委員会、学部長会議のメンバーを経験したが、委員でもないのに乗り込んで直訴という人は未だ1名たりとも小生以外に経験していない。

その頃、研究費はゼロで、全て実験器具などは手作りであった。森先生は、反応時間計測器、小生はペーパーゲージを使った筋力台などを作って深夜まで実験したものだだった。

努力の甲斐あって、時間帯の中の体育のコマ数も徐々に増え、東海近隣の大学に勤めている気心の知れた友人に、体育施設の不備を承知で非常勤に来て貰ったり、それでも不足した夜間の担当者などは、近くの高校の教員を非常勤に頼んで助けて貰った。

体育施設の充実には、時間がかかったが、集中講義で帳尻合わせをしていた実技も講義もその後、担当者の増員（専任、非常勤）で正規の時間帯の中に組み込まれ、他大学並みの授業ができるようになった。

最悪だった体育施設も今日では、両校舎とも体育館もでき他大学と比較して勝るとも劣らないレベルまで整備されてきている。

豊橋校舎には、空調が効いた体育館もあり、7面のオムニコートのテニスコート、トレーニング機器もそこそこ充実してきている。

名古屋校舎には、体育館の中にトレーニング場があり、その中には、アメリカ製のノーチラスが9機、日本製のエアロバイク（マイコン・プリンター搭載）10台、パワーマックス4台、ローイングエルゴメーター5機（アメリカ製）、その他、トレッドミル、リラクゼーションマシンなどが、ところ狭しとセットされ、運動部学生や一般学生、地域住民にも常時利用され大変好評である。

今年3月に完成した名古屋校舎の^{ほうりゅうかん}朋友館の3階には、空手、剣道、太極拳などで使用できるようにということで特別仕様の床の第二体育室を設け、5階には、25m5コースの温水プール（屋上にソーラーパネル180台を搭載し、熱源の約50%を無公害エネルギーである太陽熱に求めた）を設けた。

ジプシー体育をしていた35年前の本学体育か

らすれば、雲泥の差であり森先生も感無量のことであろう。

二人は、色々な点で違いがあった。東北青森の出身の先生と九州鹿児島の小生、酒豪と下戸、体育に対する考え方も北極と南極くらい違った。

法経分離以降、豊橋校舎所属の森先生と名古屋校舎所属になった小生の間には、距離が生じ、近年では、あまり難しい話をするともなくなっていた。同様に豊橋体育と名古屋体育もいつの間にか同じ大学でありながら理想的にも方法論的にも大きな差を生じてしまった。

豊橋校舎で、体育を充実させる努力の25年分の蓄積を全て捨てて名古屋所属になった小生は、正直に言って名古屋校舎での体育は当初、苦戦の連続であった。

名古屋所属を機会に、大学教育にふさわしい体育、名古屋校舎の教育の目玉になるような体育をやらうということを目に、従来の体育の理念とやり方を大幅に改革した。

「教育としての体育」、「スポーツとしての体育」といった発想を放擲し、「生活者としての体育」、「生活体育」、「自己管理としての体育」へと発想を大転換した。

実技は中学校や高校のように沢山の種目を欲張らず、受講者には、1つか2つの種目を徹底的に理解させ、上手にさせ、好きにさせ、この種目だったら体育的生活の具現化の手段として、生涯楽しくつき合えるというスポーツと出会って貰おうということにして、それまでの語学クラス単位を解体し、学生に好きな種目を選択させるコース制に変更した。

種目の実施にあたっては、

- ①大学教育にふさわしい体育を行う。
 - ②なるべく高校までにやらなかった種目。
 - ③技術性が高く、創造性の高い種目。
 - ④学生の支持度の高い種目。
 - ⑤苦痛耐性の体育でなくて「楽しい」体育 with pleasure を目指す。
 - ⑥その日の結果を出す体育を目指す。
 - ⑦担当者は、種目の専門家を当てる。
- と目標を設定し、授業の実施にあたっては、
- ①徹底して体育の必要性を理解させるガイダン

スを行う。

- ②健康診断の義務化。
 - ③健康生活実態調査の実施。
 - ④体力テスト。
- を義務づけた。

名古屋校舎で実施している種目は、フィットネス、太極拳、中国武術、硬式テニス、サッカー、ゴルフ、バスケットボール、バドミントン、卓球などであり、一昨年から気功も科目に採用している。

太極拳の指導者、張成忠老師は、かつて本場中国での武術のチャンピオンであり、気功の林茂美老師も中国で長年、精神科医を経験された方で、わが国気功界の超出した指導者の一人である。4月からは、新しい種目に加える水泳コースの講師には、かつての五輪選手、高橋繁浩先生にお願いすることになっている。

愛大名古屋でユニークな体育をしているということで、数回、テレビや新聞などが取り上げてくれ、今でも時々取材の申し込みがあるが、現在では丁重に断わることにしている。

体育に対する満足度は、どの調査の場合でも、専門、一般科目、外国語と比較して常になら高い。バイト漬けで大学に寄りが悪いと言われているが、体育の授業への出席率は98%であり、本学の最寄り駅である黒笹駅での乗降者数は、体育のある曜日とない曜日では大きな差がある。

学生の本学生生活の充実度調査では、「充実している」という回答に最も大きな影響因子は、学内滞在時間である。名古屋体育では、一分でも学生を長く滞在させようということで、大学の一斉休暇以外は夜8時まで体育施設を開放している。

名古屋校舎の学友会から提出されたカリキュラムに関する要望書の中に、3、4年次でも履修できる体育を設けて欲しいという項目が含まれており、この要望が、現在の名古屋体育の現状に対する学生の正しい評価だろうと率直に受け取ることができるのではないかと考えている。

大綱化に伴って、本学でも、新しい教育課程の検討が行われた。91年11月に、学長直属の諮問委員会として、各学部1名ずつからなる「新

教育課程検討委員会」が発足し、小生も教養選出メンバーの一員として参画した。

委員会では、二十数回に及ぶ熾烈な会議を繰り返して、92年5月に「愛知大学における教育課程のあり方」という改革案を答申した。

その中で、体育については、正面きって大議論はしなかったが、雰囲気的には委員の意見は体育に否定的であった。

- ①大学期における学生の〈からだ〉の意味
- ②学生の不健康生活の背景
- ③学生の体育に対する評価の高さ
- ④体育を通しての学生の大学への吸引力

などの要因を説明しながら、ごく平凡な一般市民として生活する多くの学生のために、せめて学生時代及び将来を、健康で充実した生涯を送って貰おうということで、その意味で大学体育の重要性は非常に大きいのだということを説き、理解方を求め、最終的に体育を従来どおり、講義2単位、実技2単位、合計4単位ということで必修にした。

名古屋体育は、その方向を支持し、豊橋体育は、小生の意を否定して実技2単位だけを必修にした。

校舎による体育に対する姿勢の違いが如実に表れた現象の一つとして残念な気がする。

今後の名古屋体育の改善については、学生に選択の幅を広げること、開講コマ数を減らすこと、という100%矛盾することを松岡君に要望し、彼は見事にその無理な要求に答えた体育のカリキュラムを組んでくれた。

その種明かしは、近日中に披瀝できると思うので割愛して、ここでは若干、21世紀における大学体育の意義について、述べてみたい。

小生は、20世紀を、原子爆弾と公害で人類が初めて「生命の危機」に瀕した時代であり、また、北の一部の豊かな国々（全世界人口の20%）が、無限の物質的豊かさを追求して、地球を滅茶苦茶にした時代、その物質的豊かさが必ずしも人間的豊かさに通じないことを証明した世紀だったと総括することにしている。

到来する21世紀は、機械化文明の高度化は残念ながら益々進展するだろうし、その上で、国

際化、情報化は更に進み、高齢化、地球破壊の問題も更に深刻さを増すであろう。

わが国においては、西暦2025年には、65歳以上の数が全人口の25%を占める熾烈な高齢化社会を迎える。

日本は、統計の上では男女とも世界で最も長命な国ということになっているが、高齢者の疾病率、寝たきり率、ボケ率、医療費などを見ると他国を群を抜いて高い。

日本人は長生きではあるけれども決して長寿ではないのである。

300万人の市民が災禍に見舞われ、住む家を失った今回の関西大震災の被害額が10兆円、日本人が昨年、費やした医療費がその2.6倍の26兆円である。

神戸震災とほぼ同額が高齢者の医療費に使用され、必ずしも金額に応じた医療成果を上げていない。

良心的な医者は、注射や投薬が高齢者に有効でなく、運動や食事の配慮で細胞に活力を与える「攻めの健康管理」の方が有効だということを知り、そういう方向に医療を転換した医師も幾人か知っている。

高齢化とは、量 Quantity を問題にした社会であり、長寿化とは、老人が長生きして良かったと満足するような質 Quality の社会である。そういう点で高齢化と長寿化は明確に違うわけで、勿論、我々が目指す社会は後者でなければならない。

長寿のためには、

- ①生き甲斐を持っていること
 - ②健康であること
 - ③ボケていないこと
 - ④生きるに必要な最低限の経済力
- といった条件が絶対必要である。

この準備は65歳の誕生日から始めたところで遅い訳で、少なくとも大学期の頃から始めなければならない。

高齢化社会の危惧を、支える若者の人口の少なさで指摘されているが、小生が恐れているのは、支える人間の質の脆さである。

身近にいる学生を観察していると、

- ①極端な運動不足
- ②劣悪な食生活
- ③徹底した夜型人間化
- ④最高医療による自己治癒能力の低下
- ⑤喫煙、飲酒者の増大

といった健康マイナスベクトルの生活である。こうした生活は、学生生活を不健康にするだけでなく、将来の健康に大きくマイナスに影響する。

最近、逆仏（さかほとけ）現象という言葉をよく聞く。年老いた親が、息子や娘の病気の看病をし、葬式を出すことである。

ベストセラーになった「1リットルの涙」の著者、木藤亜也さんのお母さん木藤潮香さんはよく小生宅にみえるが、いつも最後は誰が高齢化社会を支えるのかという話になっている。

若者は、自分の両親の老後は、国や自治体が面倒を見るべきだと考え、自分が老人になったら自分の子供に世話をして貰いたいという考え方をしているが、高齢者福祉の原則、「自分の老後は自分で自立」→「家族が支える」→「ボランティアが支える」→「国や自治体支える」という順番があるはずである。

若者には、高齢化社会を支えなければならない義務があるし、自分の老後は、子供たちに迷惑を掛けないようにしなければならない責任があるのである。

学生生活の充実、社会生活及び老後を生き甲斐を持って活躍するためには、健康が基本（土台）であり、そのためにはそれ相当の努力が必要であることは、徹底して理解しておかなければならない。

大学体育で必要なことは、

- ①自分の〈からだ〉の意義を正しく理解する。
 - ②体育とは何なのかを正しく理解する。
 - ③体育を好きになる。
 - ④体育を生活化する。
- ことが重要である。

〈からだ〉とか「健康」というテーマは、限りなく個人の問題だから、そういう点に価値を持たせて、体育の必要論を展開するというのはナンセンスだという意見がある。

しかし、路地のトマトが青い実を付けた時に追肥料を撒けば、大きな美味しいトマトがつくれるということが分かっている、肥料を撒くのは自由だという孤高な意見と同じである。

運動が絶対に必要な青年期に、運動不足、栄養最悪、連夜、夜更かし、喫煙飲酒が限りなく個人の問題と突っばねることはできない。

大学期の体育の生活化は、学生時代及びその後の生活でそれ相当の徳を受け、欠落はそれなりの酬いを必ず受けるのである。

歪みが、不器用だったり、運動の楽しみの欠落だったりの程度だったら、それでいいのだが、運動不足と不節制のダメージが42歳の誕生日に突然死とか、50数歳時の心筋梗塞やガン死の遠因ということになると悲惨である。

古代ギリシャの哲人セネカは、「人は死ぬのでなく自殺するのだ」と言ったが、全くその通りである。

1人の死は、同時に両親や妻（夫）や子、会社まで何らかの影響を与え1人の死では済まない。

大学が義務教育でない以上、体育が必修でなければならないという絶対的な理由は勿論ない。

京都大学や立命館大学は、体育は学生に人気があるから選択にしても受講者は多いだろうということで「選択化」し、東京大学や慶応大学は、21世紀を視野においた時、健康は一つのキーワードだろうということで「必修化」した。

選択にした大学は、従来のスポーツ型の体育のまま体育を考え、必修にした大学は、一歩踏み込んで健康の自己管理という新しいコンセプトを設定している。慶応大学藤沢キャンパスが「ウエルネス」という用語を用いているのがなによりの証左である。

小生は、今まで指摘してきたような背景からして一貫して体育の必修論者である。われわれの周囲にいる学生は、からだこそ大きいがビニールハウスの中で化学肥料と農薬をたっぷり浴びた根の張りの悪い植物と同じであるという現実を正しく踏まえなければならない。

大学教育の中で、学生のこのような今日的弱点を指摘し理解させ、現在及び将来の生活のた

めに改善させるようなカテゴリーの授業が大学教育の中に決定的に欠落し、まさにその問題と正対しなければならぬのが体育なのである。

本学の体育担当者が、この程度の説得もできないような集団であったり、この程度の理解ができないような他教科の教員の集団だったら情けない話であり、被害者は学び子たちである。

「スポーツ志向型体育」の体育教員には、大酒飲みやヘビースモーカーが多く、それはそれでもいいのかも知れないが、「健康の自己管理としての体育」の立場の教員は、喫煙者やヘビードリンカーであっては決してならない、それこそ自家撞着というものである。

3. おわりに

30年の愛知大学体育の歴史は、めまぐるしく変化し、体育施設も充実し、体育教員の数も増えた。

森先生の功績は、日本で最悪だった本学体育の充実のために、人材を集め、体育施設・用具を充実させ、公開講座、紀要の発行までできるような体育にレベルアップを行ってきたことであり、35年前と比べると比較にならないくらい愛知大学体育に変えられたということである。

森先生との心の距離が開き始めた頃、歴史に「……たら」という言葉はないのだそうだけれども、小生が少し酒が飲めて、森先生がもう少し酒が弱かったら、愛知大学の体育の歴史は確実に変わっていたらと冗談をよく言っていたが、こうして退任が目前になると、大変失礼な言い方だけれども、どうして森先生をもっと小生の方に引きつける努力をしなかったのだろ

うという後悔の念で一杯である。

冒頭にも述べたように、スポーツの因子分析については、パイオニア的存在であり、その頃の先生の研究仲間からは、中西光雄先生とか藤田厚先生など、後日、日本体育学会を大きく支えた錚々たる研究者が数多く生まれている。

森先生と二人の頃は、原書講読などにも付き合っていたが、特に思い出に強く残っているのは、Cureton, T. K. の名著、Physical fitness appraisal and guidance を読んだこと、統計法では、差の検定でt-検定しか知らない小生に、その集団がパラメトリックなのかノンパラメトリックなのかを確かめてから、どの検定法を使うのかという手続きが必要だと教えて貰ったことなどである。

森先生の卓越したセンスを吸収しながら、学問研究の分野で森理論を開花させるフォロアーとしての努力を遂行しなかった小生の小者ぶりを情けなく思っている。

森先生とは、苦しい本学体育の時間を共有でき、改革のために一緒に力を合わせる事ができたこと、小生に先輩面しないで、好きなようにやって下さい、と放任して貰えたことの二つを大変感謝している。

「やり残した仕事があるので、引き留めないで下さい」という言葉で小生は先生を引き留めることを断念した。どうぞご健康に留意されて、その仕事を達成して頂きたい。

末尾に、先生の長年にわたる本学体育へのご貢献と後輩への多大なご指導に対し、心から感謝の意を表します。